



## 編集後記

今年台風が多い。異常に早い時期に1号ができたかと思えば、通常ではありえない東から西へ移動する動きもあり、そして西日本豪雨に引き続き押し寄せた台風21号が大きな被害をもたらした。

スマートフォンの普及は、これまででは考えられなかった映像や動画をニュース画面に提供する。瓦が吹き飛ぶ屋根の動画、屋上から転落するベントハウス、橋の上を走行中に横転するトラック。生々しい映像が刻々とアップされ、ニュース番組で紹介される。その映像・動画はまさにドキュメンタリーである。

神格化されたハンガリーの戦場カメラマン、ロバート・キャパ。ピカソのゲルニカで知られるスペイン内戦、日中戦争、第二次世界大戦(ヨーロッパ戦線)、第二次中東戦争、第二次インドシナ戦争など戦場で写真を撮り続け、1954年に北ベトナムで取材中に地雷の爆発で亡くなった。彼がスペイン内戦の際に撮った「崩れ落ちる兵士」は諸説ある

真偽のほどは別にしてピューリッツアー賞を受賞した。そのキャパの言葉に

生き残れる確率が50%もあるなら、私は迷わずパラシュートで降下して写真を撮る

がある。報道カメラマンの座右の銘として知られる言葉だが、カメラマンに限らずジャーナリスト全てに当てはまる名言だろう。

ところが、いまやスマートフォンを持つ全ての人がロバート・キャパになる可能性があるのだ。

しかも全世界にこの便利な文明の利器をもつ人が溢れ「生き残れる確率」など関係なしに撮影された写真がインターネットを通じて即時に世界中にばらまかれるのだ。人類総ニュース・カメラマン時代とも言える状況である。

しかし、である。

そのような状況だからこそ、ジャーナリズムはそうした表面的な表現だけでなく、ニュースの奥に潜む様々な事象に目を凝らし、一步踏み込んだ取材と考察によって真相を伝える役割を果たさなければならぬのではないだろうか。徒に喧嘩腰になるようなことでは

なく、しつかりと腰を据えて理的にしかし揺るぎないポリシーをもって取材に当たり、そして慎重に、しかし大胆に発表しなければならぬのだ。

テレビをつければ、そこに登場する出演者全員がジャーナリストのような顔をし、聞いたふうな事を話す時代である。だからこそ、一步踏み込んだ取材と、冷静な考察、そして揺るぎない確信に基づいた報道を心がけなければならないのだ。

キャパの名言をいくつか紹介しよう。

撮影する人間を好きになれ。そしてそれを相手に伝える

いい写真を取れないのはあと半歩の踏み込みが足りないからだ

どちらも取材する対象にいか近づき、深く関わり、そして冷静に取材するかということではないだろうか。

最後に筆者が一番好きなキャパの言葉をご紹介します。

戦場カメラマンの一番の願いは失業することなんだ

(溪)

月刊公論 MONTHLY  
**KORON**

10月号 第51巻10号

平成30年10月1日発行 毎月20日発売  
本体価格848円(税別) 送料86円

発行人 発行所  
印刷所 取次店

中大吉一 編集人 林 溪清  
株式会社財界通信社  
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ボナフラワービル  
TEL.03-5379-5611(代)、FAX.03-5379-5616  
株式会社廣濟堂  
日本出版販売/大阪屋栗田

●直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。  
●万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。